

## 本日はよくお参り下さいました

3月19日に春一番がふき、一週間後の27日には開花宣言が発表されました。この数日間で一気に街が春らしくなりましたね。年度末には今月からの消費税8%効果で、スーパーも活気づき、いつもの年度末とは違う慌ただしさがありました。

いよいよ新学期、新年度が始まります。4月は境内にたくさん草が生えてくるので、景観を損なわないよう草とりにも励む日々が続きます。これからも、境内を清浄に保ち、皆さんに気持ちよくお参りしていただけるよう努めてまいります。さて、4月は和風月名で卯月と言いますが、その由来は諸説あり、1. 旧暦で稲種を植える月「植月(うつき)」から、2. 十二支の卯は四番目で、四番目の月だから、3. ナエウエツキ(苗植月)の転、などと言われています。しかし卯の字を当てるようになったのは後世のことで奈良時代の人は知らなかったと言われています。旧暦の4月は稲種を植える月にあたることから、苗を植える月という語源が有力のようです。日本人の自然との共存共栄を尊ぶ心はこのようなどころにも現れているのですね。今月も皆さんのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。権禰宜 道子



## 29日 昭和の日

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす日。もともと昭和天皇のお誕生日です。日本が戦争をしていた時代を知らない世代もいると言われている昨今、昭和がどんな時代だったのか、昭和から学び、昭和を忘れないことは、平成の世に生きている私たちにとって大切なことです。昭和という時代の中で国民の心の支えとなったのは昭和天皇でした。それはなぜか。戦争は天皇陛下の玉音放送で終わりました。でも戦争は天皇陛下が望んでいたことではありませんでした。イギリス、フランス、オランダなど白人種の国が力の弱いアジアの国々を次々に植民地にしてきた時代。アジアの小さな国日本が日清、日露の戦争に勝ち清国から朝鮮半島を守り、ロシアから朝鮮半島を守ることは自国を守ることでもあったという考え方もあります。しかし明治天皇が崩御し、大正になったころから陸軍と関東軍の一部の者が軍の決まりを守らなくなり、そしてとうとう関東軍のものが上の命令なしに満州鉄道を爆破し、満州の大元帥を名乗る人物を殺めるという過ちを起こします。それによって満州事変が起こります。その時昭和天皇は「こんなことをしていると、多くの国々が力づくで我が国を滅ぼしに来るだろう、そうすれば国も国民も不幸に陥れることになる。それでは国民やご先祖に相済まない。九千万の国民と代々のご先祖から受け継いだ我が国の行方は今私の責任である。それを考えると夜も眠れない」とひどく心配なさっていました。常に平和を望まれた昭和天皇だからこそ終戦後、マッカーサー元帥の前でも「全責任は私にある。私一人で背負う」と仰せになったのです。戦後の復興にも大きなお力を注がれた昭和天皇は本当に、ご立派な方だったのです。参考文献『昭和天皇』出雲井晶



## 天神さまの豆知識

「神(さかき)とは」

神は神社のいたるところで見かけ、神聖な木とされています。『古事記』では、天照大御神が天の石屋戸(あめのいわやと)におこもりになったときに、多くの神に玉や鏡、布をつけて石戸の前に立てたと記されています。他にも、記紀(『古事記』『日本書紀』の総称)には、鏡、剣、玉が付けられた神(賢木さかき)の記述があり、古くから神事に使われていました。

神の字は、「神」と「木」という字を組み合わせて作られていることからわかるように、神には、神の木という意味があります。また、「さかき」の語源は「境の木」つまり、神様の聖域と俗界を分ける木ともされています。もともと神とは常緑樹の総称で、固有の植物名ではありません。現在、代表的なものは、ツバキ科のもですが、地方それぞれの常緑樹も使われています。このことから「さかき」の語源は、常磐木(ときわぎ)である「栄の木」とする説もあります。神は神前に供えられるほか、神前で舞い人が舞う際に手に持つ採り物としても使われます。一年中常に青々とした緑を保つ常緑樹の枝が使用されるのは、それが神さまの、尽きることのない恩恵の証とされるからです。



## 日本神話の世界 全十一回

第一回「世界の始まりに現れた神々」

天地がはじめて開けたとき、神々の世界の高天原に最初に現れたのは天之御中主神天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)、次に高皇産靈神(たかみむすひのかみ)、神産巢日神(かみむすひのかみ)が出現しました。この三柱の神は、いずれもついでに身を隠されました。次に国が生まれたことで水に浮いた脂(アヲ)が、海月のように漂っていたとき、水辺に生える葦(アシ)が、葦の若芽(アヲ)の勢(イキ)で伸びるもついでに出現した神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神(うましあしかびひこのかみ)。その次に出現したのが天之常立神(あめのとこたちのかみ)です。この二柱の神もまたひとり神で身を隠されました。引き続き語られる世界の始まりの神話は、より古い素朴な伝承に基づきます。その背景には早春の水辺の生活が目につかびます。葦の若芽は水面に現れたかと思ふと、たちまちすくすくと伸び上がります。万物が生じてくる根源は春の芽吹きのようなのです。その根は大地に根ざしています。そのあと出現した四柱の神のうち、最後に現れた二柱の神が有名な伊邪那岐(いざなぎ)神、伊邪那美(いざなみ)神です。参考文献『神話のおへそ』

榊扶桑社発行



神代七代の神々